作家活動と図書館運営
―椋 鳩十の場合―

早野 喜久江

一 はじめに

児童文学者として人間が自然と如何に共存して生きていくべきかと数々の作品を残された椋 鳩十（本名・久保田彦穂）は、戦後鹿児島県立図書館長に就任、全精力を傾けて図書館作りと子どもの読書活動の推進に力を注いでいる。この運動は、鹿児島県のみならず広く全国に広がっていき各地の読書推進活動の広がりと充実を促すこととなる。

公立図書館は、戦後「図書館法」[1]（一九五〇）の制定で図書館運営が大きく変化し、今までの資料保存の図書館から地域住民の生活に密着した住民本位の図書館活動に取り組むことになる。しかし、椋はこの「図書館法」が制定される前に、すでにこのサービスに着目している。図書館サービスの一環として、読書を社会化する上で画期的な意義をもたらしたと考える。いち早く提唱した椋館長は日本の図書館史の一ページを飾ったと言っても過言ではない。おおらかな人柄と自らの足でくまなくかけめぐり、人々に接して読書運動を展開したという実績に負う所が多いと思う。

時代背景を考証しながら、如何に鹿児島の地に読書運動を進めたか、椋の作家活動とともに、椋館長が担った意義を考察する。

二　南国鹿児島へ移住

山国信濃に生まれ、山を友として育った椋は、大学卒業と同時に鹿児島県へ移り住むことになったのであるが、最初から鹿児島を目指していたわけではなかった。椋は南洋に強く憧れ南洋に思いを馳せていた。大学を卒業後読んだジャック・ロンドンの「南海物語」[2]に影響を受け、南洋へ行こうと考えていた。対談の中で、

田舎に育って、そして山の中に育ったから海を見たことがないでしょう、ああいう海の物語を書こうと思った。そして、そのころ、いまの北南洋の島は日本が統治していたころで、あそこへ行って、日本人の書いたうんと田舎くさい南洋物語を書こうと思った。ぼくは、サイパンだったかな、どこかで徒弟学校の口があったんです。ぼくはそこへ行くつもりで、そして姉が鹿児島で医者をしていたから、大学病院の前身の県立病院。姉に、いろいろ、小遣いもらったり世話になっていたから、姉のところへお別れに行こうと思って、……[3]。

と語り、そのとき学生結婚した妻と子どもを静岡の実家に、やはり「お別れ」のため帰していた。しかし妻の親に反対され足止めをされてしまった。このような状況の中、姉に相談して鹿児島で就職口を捜すことになったという。はからずも南国鹿児島で暮らすことになった椋であるが、

鹿児島というところは、住みつくと非常にいいところ（略）住み良いままに、とうとう五十年間住んでしまうのであった。

生まれて初めて鹿児島にやって来た椋にとって、そこで見るもの聞くものはすべて新鮮で驚くものばかりであった。南国の風土が椋に与えた感動はすべて新鮮なものであり、その感動を綴っている。随筆の中で、[4]

鹿児島に住みついて、朝夕に、この山を眺めているうちに、私は桜島が、たいそう気に入ってしまった。が、しかし、私が、この山を眺める折の焦点が、どうも一定しているようなのである。あたりが暮れかけて、街や海が薄青く、くろずんで行く時、桜島の頂点だけが暮れ残って、焼けただれた、むきだしの山肌が夕陽をうけて、金色に、うすい紫に、ひとりぽっちで空に輝いている時など、美しいなあ、と思わず見とれたりする事がある。

と、特に桜島の夕陽が美しいと熱き思いを語っている。

三　児童文学者としての功績

椋は動物物語に代表される児童文学者であったが、最初から児童文学を書いていたわけではない。一九二六（大正十五）年、久保田彦保のペンネームで詩集『駿馬』を翌年『夕の花園』を刊行し、詩人としてスタートしている。その後、七編の山窩小説をまとめた『山窩調』[5]を出版している。椋は少年の頃、父から山窩の話を聞かされていたという。短編集のため、友人にも内緒でこのペンネーム「椋 鳩十」を使い自費出版をしている。ペンネームの由来について、次のように述べている。

私は、山窩や素地屋（きじや）を扱った山の物語を書いたことがある。（中略）新しく出発するのだから、イミテーションの名前でなく、創作的なにおいのある名前を見つけたいと思った。昔のことだから、だいぶぼやけてはいるがなんでも一か

月ほど考えたと思う。だから、かなり難産のペンネームである。素地屋の姓は小椋と書いてオグラと読む。私の書いた作品の素材は、素地屋の山窩だから、小椋の小をとりさって椋（むく）とすることにした。鳩十（はとじゅう）の方は、そのころ住んでいたワラ屋根のてっぺんに、鳩がきて、毎日、クークーと鳴いていたので、ふと思いついてつけたのである。[6]

難産の末のペンネームとあり、山窩小説のそこに展開される世界は、今日読んでも決して新鮮さを失っていない。野生のむんむんとした山の民の躍動的な生きざまが描かれている。

時はまさに思想弾圧による国家権力の重圧が国民の上にひしひしと、のしかかっていた暗い時代であった。戦争遂行のため言論統制、思想統一を押し付けていた。

昭和八年十月『鷲の唄』[7]は、刊行一週間後には発売禁止になっている。放浪窃盗の徒、山窩を扱った反国家的反良俗的な小説というのが発禁の理由だった。

言論統制・思想統制に関わらないものは、何か考え、椋は動物文学・児童文学へ傾いて行った。

戦時下という一番不合理で、非科学的で非人間的な時代に動物というものに姿を借りて生きることの意味とか、大切さというものを考えたということである。

椋 鳩十が動物文学作家といわれる、そもそものきっかけは、「少年倶楽部」[8]の作品によってであることを知ることができる。ある編集長の運命的な勧めがあった。

椋は動物の生態をよりよく知るために、信州や鹿児島の山を歩き、家にはクモ、ムカデ、トカゲ、ネズミ、小鳥、犬、猫を飼い観察日記をつけたという。まさに、動物文学の創始者として、実地踏査に基づく見聞や体験がその裏付けになっている。確実な生態観察や調査の上に成り立ち、事実を基礎に置いている。

椋の児童文学は、その文体の特徴を考えただけでも児童文学としての素地を充分備えているといえるが、物語構成や筋の面白さは、大人でも子どもでも同様に楽しむことができる。

特に椋文学の掲げるテーマは生命尊厳を根底に種々複雑な問題を含み、それが物語の読み応えとなっている。椋は読者としての子どもを充分意識し、配慮しながらも、子どもだけにとらわれず大人向け児童文学といえる作品世界を構築しているのである。

生命の尊厳の美しさを動物に託して書き、読者を引きつけ夢中にさせ、納得させる物語の展開の巧みさは見事と言える。

人間と動物の強い結びつきが主たるテーマの作品を紹介したい。

私小説ともいえる『マヤの一生』[9]は、椋家で飼われていた日本犬（熊野犬）をモデルとして書かれているこの作品は中期の最高傑作と言われている。「マヤ」とは、お釈迦様の母の摩耶からとったという。猫のペル、ニワトリのピピ、白うさぎを交えて賑やかな生活が子どもの成長とともに書かれ、時には用心棒代わりになり家族の一員となっていた。物語の前半では、一家と動物達の美しくのびやかな生活が明るく描かれ、それとは対照的に後半では、戦争のもたらした影が町中を襲い、マヤはその犠牲となって殺されるという暗く悲しい結末が描かれている。前半の動物たちの美しく思いやりのある戯れと後半の人間の巻き起こした歪んだ争いに対する怒りの筆致の見事なコントラストが構成を劇的なものにしている。いつのまにか、善良な庶民たちを心のすさんだ人たちに変えていく。この物語の意図は、戦時中の食料不足を理由に家庭で飼われていた犬が徴用という目的で殺された事実を描いていることである。ここには戦争の恐ろしさの訴えと権力に対する反抗の精神があり、戦争批判でもある。「マヤ」の最期は『マヤの一生』に描かれたよりもっと悲惨であった。強制連行された「マヤ」は、二人の弟の目の前で撲殺された。久保田喬彦氏は著書の中で述べている。

どんな状態にあっても、奪うことのできぬものがある。それは心だということ描こうとしたんだネ。人間というのは、異常な状態に追い詰められると、心まで異常になる。しかし、その中にあっても本当の真実の心は奪うことはできないものということだネ。死にかけた犬が、最後の力をふりしぼって、かわいがってくれた子供を訪ねてくるということで、そういうことを象徴させようと思った[10]。

椋は戦争が終わって、守りぬくことができなかったマヤの命に対して深い胸の痛みをぬぐい去ることができなくてこの作品を描かずにいられなかったのであろう。そうした椋の思いは児童文学という形で描かれながらも絶えず大人に訴えかけるものである。『マヤの一生』を通じて描かれた批判の声は、大人の文学としての側面をも合わせ持つ椋作品の特質と言える。『マヤの一生』は、初期作品にみられた素朴な動物の命・尊さの児童文学作家を乗り越えた社会性を帯びた問題提起・告発の児童文学作家への成立が見られる。

『モモちゃんとあかね』[11]という作品も、椋家で飼われていた白猫・モモとお嬢さん・あかねさんの物語である。モモとは、波止場でオランダの水兵さんからもらった猫。椋家にはモモの家族が七匹暮らしていたが、あかねさんに一番懐いていたのが年長のモモという。子猫の頃から一緒に過ごし寝るのも一緒だったという。

娘が、外に出ていくということを、ちゃんと、感づくようでした。そして玄関までつけていって、しばらくの間、ガオー、ガオーとなきたてるのです。（中略）モモは、死期がいよいよ、せまってきたのを、動物の敏感な心で感じとったのでしょう。そして、むすめのそばで、死にたかったに違いありません。とても、とても、考えられないような力をふりしぼって、娘の声をたよりに、階段をはい上がっていったのです。

最期のモモは、あかねさんに抱かれながら、あかねさんの小指をくわえたまま力つきたという。愛情を注ぐことによって、気ままで感情を露わにしないという猫の生態でも人間と動物との信頼関係が生まれることを観察、探究していることに気づく作品である。

『マヤの一生』と『モモちゃんとあかね』は、第一回赤い鳥文学賞を受賞している。

九州には、肥後（熊本県）の「彦一（ひこいち）とんちばなし」とか豊後（大分県）の「吉四六（きつちょむ）ものがたり」などの民話上の面白い人物が有名であるが、椋は、また薩摩（鹿児島県）に伝わる民話を紹介している。

当時、借家として住んでいた大家・津崎藤太郎さんから聞いた話をまとめたものである。毎晩、夜のふけるまで話をしてくれたようである。[12]

代表的な民話『日高山伏物語（ひだかやんぶしものがたり）』[13]と『日当山侏儒物語（ひなたやましゅじゅものがたり）』[14]が全集の中に収められている。

『日高山伏物語』は、薩摩藩が経済的に困った時、その厳しさをうらんだ民衆が”日高山伏“にうっぷんをはらしたという笑話である。庶民の生活は、暗く、苦しい。うっぷんをはらすには派手な節約の範をたれている”日高山伏“に向けられたのである。苦しい暮らしを強いられる農民のための恨みが”日高山伏“に集中し、ケチもケチ、ドケチな話を作りだし、それをすべて”日高山伏“にかぶせ、笑い話として語り合い、うっぷんをはらしたのであった。”日本一のおかず“ケチンボウの山伏が描かれている。財政困難に陥っていた時代、財政建て直しに一役を引き受けたのが”日高山伏“であったのである。

『日当山侏儒物語』とは、日当山温泉に住む小男の話。日当山に住む侏儒は、島津の殿様に仕えた日本版の「道化師」と言える。日当山の地頭になり、頓智で殿様をやりこめ民衆を守ったという民話である。つまり日当山の侏儒は、封建時代の民衆が現実の非人間的な生活から脱出するための、期待と願望をこめて生み出された人物だったのである。

このように、伝えられている民話は、史実に正確な伝記としてではなく、いわば伝説上の人物として伝えられていることに意味が込められている。

これらの物語は、椋文学の一つの側面として深く味わうことができる。

民話や伝説は民衆の間に語り継がれた民衆の文学であり、そこには民衆の本音が息づいている。それは弱者の立場に身を置く椋文学の原点でもある。ユーモラスな頓智に満ちて楽しいが単純な笑い話とは一味違う民衆の代弁者としての物語である。節約を重ねながら貧しい生活を強いられる民衆から際限なく絞り取ろうとする政治への批判は、封建時代ばかりでなく現代社会にもそのまま通じるものである。時代の雰囲気をそのまま語れば暗く悲惨なものになったに違いない物語が楽しい笑いを伴うということは、民衆文学として注目すべき点である。これは民衆が自ら考え出した時代を乗り越えるための方策であろう。

この地、鹿児島県はいまだ民話が生きる街で、そのような世界が失われていないのではないかと思うのである。

高度成長に伴う公害や自然破壊の問題をとりあげた『におい山脈』、『ネズミ島物語』や『カワウソの海』などは、自然と人間の関わりを考えさせてくれる物語である。椋の作家魂のたくましさ、ひたむきさに心うたれるのである。

四　図書館長としての図書館運営

一九四七（昭和二十二）年十一月、鹿児島県立図書館長に就任した。戦後すぐの焼け野原の地・鹿児島では、図書館長を誰に委ねるか検討を重ねていた。

当時の新聞記事がある。それによると、

図書館長はさる七月五日から空席であった。この間知事[15]は石橋をたたきつづけてきた。たった一人の館長を決めるのに、実に四ケ月余、慎重に『熟慮』していたものである。この間に民間のある有力者も介在したし数名の候補者が知事の招きによって会談したり、結局久保田彦穂という『無難』な決定をみるに至ったのである。

アメリカ軍による思想介入もはなはだしく、一九四七（昭和二十二）七月、戦時下[16]図書館を守り抜いた加治屋哲館長は、紀元節の君が代斉唱、教育勅語の奉読が軍政部の機微に触れて退職を余儀なくされた。その後栗川久雄館長代理が後を受けていた。

空襲による爆弾、焼夷弾により市街地の九割が焦土と化した鹿児島であるが、幸い県立図書館は焼失を免れた。書庫に保管されていた蔵書一〇万冊の大部分は無事に保護され、焼失の被害にあった図書は貸出中の千五百冊にとどまった。

図書館長に起用された椋は、当時を次ぎのように語っている。

私が鹿児島県立図書館長になったのは、昭和二十二年の秋であった。玄関の前に立つと、見渡すかぎりの焼け野原であった。残っている建物と言ったら、図書館と県庁と市役所と、二つの百貨店、ほんとにそれだけであった。（中略）それに、図書館と言えば、十五ある部屋のうち、十二までが警察署に占領されていた[17]。

アメリカ軍支配下の不自由な中での図書館運営である。

進駐軍に呼び出されて軍国主義的な図書を焼き払えと叱責されたという。

この時椋館長は、

「公共図書館は、国民が調査・研究し、知り考えることを目的としているものである。戦前の日本がどのような考えをもっていたか。それをどのようにして国民に植えつけようとしたか、そのため国民はどのような目にあったか、そういうことを知り、考え、将来どのようにしたらよいかを考えるためにも戦時中に出版されたものも大切である」と答えて焼き捨てなくてすんだという。[18]

椋は「図書館というところは、実践機関といったらよいか、実施機関といったらよいか、そういうにおいを、たいそう強く持つところである。」と述べている。また、図書館の仕事を始めてから、多くの人々が、読む力はそれぞれ持っているが、読書習慣が身についていない人が案外多いということに気がついたと言う。その実現に向けて次のようなことを考えた。

椋の図書館論「鹿児島県立図書館の館外活動のあり方」[19]の中で、

椋は、県立図書館長として「それぞれ異なった個性を持った地域に、ただ表面をなで回すようなサービスではなく、地域住民の血液の中にまで流れこんでいくような、生き生きとした図書館サービスが県立図書館という立場でどのようにしたらなし得るだろうか」と、全県民に喜ばれるようなサービスを考えていた。

全地域へのキメ細かいサービスとして、ブックモービルを利用したらどうかと、本場アメリカにまで調査に出かけている。確かにアメリカにおいては、限られた範囲内でのキメ細かなサービスが実施されていた。しかし、その方法が鹿児島県に合うとは思えなかった。

それだけの費用をかけるならもっと、違う日本風土に合う方法があると考えていた。

その方法が市町村立図書館や公民館が大きく育つことが県民全体へのサービスをする根本的なことであると身近な人と語り合って知り得たことであった。あらゆる層への提案として、県立図書館は間接サービスの図書館であり、市町村立図書館・公民館図書部は直接サービスの図書館という立場に立って行うという案である。そこで県立図書館は農政部・県農協と協同「農業文庫」編み出した。農家の人に読んでもらいたいものを市町村の図書館や公民館に送り込む。読書によって農業の新しい知識や技術を導入し、農村を蘇らせようとするものである。そしてもう一つが「母と子の二十分間読書運動」である。県立図書館が中心となり、地域へのサービス活動を次々にしかも活発に展開し、実践するというのである。

五　母と子の二十分間読書運動とは

子供が　小さな声で
　教科書以外の本を
　二十分間位、読むのを
母親が　側で
　静かに、耳をかたむける[20]

県立図書館正面に掲げられた垂れ幕

これが、運動の主旨であり、「立体的読書運動」とも呼ばれている。右の写真は、鹿児島県立図書館正面に掲げられた読書推進を図る垂れ幕である。[21]

子どもが読むのを、母が聞く。という、一つのことからたくさんの効果を期待している。

母と子の心の触れ合いがそこに生まれる。母と子の二人だけの貴重な時間。

それは、母と子のつながり、そこから開けていく様々な問題を考えていたという。その子どもの力に合った読み物を毎日、毎日二十分間ずつ読んでいく。こういうことの積み重ねによって少しずつではあるが、時間をかけながらものを理解する力が備わり、辛抱強く続けていく。昭和三十四年の構想以来、十年以上にわたり熱心に説き続けられてきた運動である。

椋のことを「読書運動に命を燃やした人」とまで言わしめたのである。椋の考えた狙いはそこにあった。

まず、子どもが音読をする。子どもが音読をすることで母は聞くだけで、知識を得たり、物語を味わったりすることができる。また、読んでもらう心地よさを味わえる。親子で同じ本を読むことで共通の話題ができる。時には、同じ所で感動する感性を共有することができるのである。子どもが本を読んでいる時は、子どもと二人だけの時間を過ごすことができるのである。子どもにとって母親を独占できる時でもある。母親にとっても子どもの学習に関わることができ、子どもの本を読む意欲を継続させることに繋がるのである。

椋作品には、子どもと一緒に必ず親が登場する。子どもを見守る温かい大人の眼差しが感じられる。それは語り手としての椋自身の目でもあり、また登場人物の一人として親の目でもある。椋は普通の親子関係を描くことによって、大人が子どもの内面に及ぼす影響がどんなに大きいものかという問題を提示している。大人の何気ない一言が、思いのほか子どもを傷つける。一度傷つけられた心は、後で繕おうとしても元通りになるものではない。

母親も耳を傾けて聞くことは、子どもと同じ心になって子どもの相手をしているということになり、子どもの読み方に神経をたてるより、子どもの読むものに自分も静かに入り込もうとする母親の態度が大事になる。

子どもの心のなかで母親の声というのは、金の鈴のごとく鳴りながら死ぬまで生きつづけると思う。(22)

と、語っている。

この運動の発想の底に、かつての祖母や母の昔話を聞いた体験がある。椋は中学に行くまでいろりの傍で昔話を聞いたという。椋の文体の源泉に祖母の語りのあったことは本人の認めるところでもある。椋はまた母親たちに子どもに寝物語を語り聞かせることの効用を繰り返し語ってきた。ベットの中の子どもの世界は、音楽のようであり、お話を聞いた後の、うっとりした気持ちのようなもの、と述べている。ここに椋の読書運動の原点が読み取れるように思われる。

子どもが好きなもの、熱中しているものを選ぶ。そういうものに関係した読み物を与えれば、子どもは飛びついてくるに違いない。

あくまでも、子どもと同じ心になって、子どもの読むものに聞き入ることであり、親と子だけの世界でなく、そこには第三者の物の考え方が入るので親子の世界を大きく広げていくことになる。

親と子の心の距離を縮め、そしてそのことが、子どもの心に大きな影響を及ぼすものだということが言える。母と子どもが静かに同じテーマで子どもとともに微笑み、或いは涙ぐみ感動に浸る。読書における感動ということは、極めて大切なことであり、これが読書習慣への環境づくりの一環になるのである。本好きになるかどうかは、幼い日の家庭環境と極めて深い関係をもつことになり、絶えざる繰り返しと、長い時間が必要になるということを知っておくことが大事になる。

「テレビやマンガでは味わえない喜びを知ってもらいたい」と、語っている。

マンガは、副食物であり、マンガより質の違った世界を味わわせ、それに興味をもたせることのほうが効果的であるという。運動をはじめてから、マンガを読む量、テレビにかじりつく量がぐっと減って来たというから驚きである。

久保田喬彦氏によれば、「母と子の二十分間読書運動」の第一号実験台だったと著書に記している。

夕食準備前の母と子の読書は、私の小学校一、二年ごろまで母が読んでくれ、三、四年ごろからは、夕食準備をしている母のそばで私が声を出して読むのである。母も聞きながら、疑問が生ずると、「そこ、いま一度、ゆっくり読んでみて」「いま読んだ字は、まちがいでは？」と声をかけ…（中略）母と子が台所で本を読むのが、わが家の習慣となっていった。[23]

「母と子の二十分間読書運動」の成果について、

読書力が伸びたと評価し、読書を通じて親子関係が良好になったというので椋が期待していた通りである。また、マンガばかり読んでいた子どもたちが自ら進んで本を読むようになり「マンガ本が売れなくなった」という事態も生まれたほどである。

県立図書館がなし得る地域へのサービス活動を次々にしかも活発に展開し実践していく。その中の一つが鹿児島県のみならず日本全国に大きな輪となって広がった「母と子の二十分間読書運動」であり、大きな成果をおさめたことは周知の事実である。

一九八〇（昭和五十五）年度全国図書館大会が「地域の文化と図書館を考える」をテーマに十月三十日から三日間の日程で鹿児島県で開催された。開会式では、大会会長鎌田要人県知事らの挨拶の後、「母と子の二十分読書運動」など図書館活動に功績のあった元鹿児島県立図書館長として日本図書館協会 浜田敏郎理事長より感謝状が贈呈されている。

六　おわりに

椋が鹿児島県立図書館長時代に発案し、実践した「母と子の二十分間読書運動」は、わが国の読書運動のさきがけともな

った。児童文学作家であり、教師の経験があった椋にとって「母と子の二十分間読書運動」は、図書館行政と教育行政が協力したところで生まれたことによると言ってよいと考えるが、椋文学の根底にある美意識を彼は読書によって子どもの心に育てようとした。その意味において読書運動は椋文学に重要な位置を占めていると言える。「農業文庫」に関しては、日頃から本を読む習慣の少ない農村部の人々にとって本を読むという行為には繋がらなかった。行政により読書習慣は整えられたが、利用する住民の主体的読書意欲が希薄であったと考えられる。椋は、作家であると同時に、優れた教師でもあり、卓越した図書館人でもあった。また、創作だけでなく「日高山伏物語」や「日当山侏儒物語」などの民話の再話も手がけた。そして、それぞれの時、それぞれの場所で己の職を果し、社会に大きな貢献をし、足跡を残したと考える。

一九六六（昭和四十一）年三月、鹿児島県立図書館長を辞任、鹿児島女子短期大学[24]教授兼図書館長に就任し、「児童文学」と「読書指導」を一九七八（昭和五十三）年まで教えている。

椋鳩十記念館が故郷・信州喬木村と鹿児島県姶良市にある。

長野県下伊那郡喬木村には、一九八九（平成元）年、生家跡の墓地に椋鳩十胸像が建立されている。一九七九（昭和五十四）年、椋夫妻は喬木村の地に別荘を建て、夏季に訪れていたという。一九八七（昭和六十二）年十一月には、喬木村名誉村民第一号に推挙されている。一九九二（平成四）年八月に椋鳩十記念館・図書館が開館している。

鹿児島県姶良市の椋鳩十文学記念館は一九九〇（平成二）年六月に開館している。また、鹿児島県立図書館前庭には、昭和五十八年建立の椋鳩十文学碑「感動は人生の窓を開く」[25]があり、姶良郡加治木町反田には昭和五十八年建立の「力一杯今を生きる」の碑文がある。両記念館においては、例年の行事として読書感想文コンクールを実施している。

注

（1）「図書館法」公立図書館に関する法律で「社会教育法」第9条第2項を受けて一九五〇（昭和25）年に公布された。対象とする図書館は、地方公共団体が設置する公立図書館と日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人が設置する私立図書館である。これらの図書館について、定義と役割、サービス、専門的職員としての司書及び司書補の資格、国及び都道府県の役割などを定める。

(2)『南海物語』ジャック・ロンドン自身の南太平洋での航海の体験を描いた作品。
(3)鳥越信氏との対談「日本児童文学」一九八〇（昭和55）年6月号特集＝椋鳩十の世界
(4)「難しい山」『椋鳩十の本』第21巻（昭和57年9月）理論社
(5)山窩とは、日本の山間部を生活の基盤とし、山野を渡り歩く漂泊民のこと。山の民の躍動的な生き様が作品にほとばしる。
(6)「東京新聞」（昭和45年12月20日）たかしよいち著『椋鳩十の世界』一九八八（昭和63）年1月 理論社
(7)春秋社「性描写と無頼放浪の徒を扱っている」として発売禁止となった。
(8)編集長の須藤憲三氏の熱心な勧めを受け児童向けの動物物語を書く。
(9)一九七〇（昭和45）年大日本図書。国際アンデルセン賞国内賞受賞・児童福祉文化奨励賞受賞・赤い鳥文学賞受賞。
(10)『聞き書き・椋鳩十のすべて』本村寿一郎著一九八三（昭和58）年10月 明治図書
(11)一九七一（昭和46）年ポプラ社
(12)『椋鳩十 全集 第12巻』一九八五（昭和60）年3月 ポプラ社
(13)『日高山伏物語』一九五五年（昭和30年8月6日～10月31日）「南日本新聞」掲載。
(14)『日当山侏儒物語』一九五四年（昭和29年10月5日～11月14日）「南日本新聞」掲載。
(15)重成格知事のこと。昭和22年初めての知事選挙で当選、26年再選され任期満了まで前後10年間にわたり知事を努めた。
(16)「南日本新聞一九四七（昭和22）年11月13日 南日本新聞社
(17)『社会教育』「あのころの思い出」たかしよいち著『椋鳩十の世界』一九八八（昭和63）年1月 理論社
(18)『近代日本図書館の歩み 地方篇』一九九二（平成4）年3月 日本図書館協会
(19)『図書館雑誌』57・一九六三（昭和38）年9月
(20)『図書館界』14・一九六三（昭和38）年4月
(21)『近代日本図書館の歩み 地方篇』一九九二（平成4）年3月 日本図書館協会
(22)『人・出会いのすばらしさ―椋鳩十のわんぱく時代』一九九〇（平成2）年2月 あすなろ書房
(23)『父 椋鳩十物語』一九九七（平成9）年6月 理論社
(24)鹿児島市内にある私立短期大学。一九六五（昭和40）年に設置された。2学科5専攻と1学科からなる。椋に関する資料が附属博物館に保存されている。
(25)『新訂増補 全国文学碑総覧』二〇〇六（平成18）年12月 日外アソシエーツ